



遊びゐる冬日を能登へ送りたし
 国見敏子
 俎始珠洲の浜塩ひとつまみ
 久保美智子
 子ね祭まつりや道深々と山へ入る
 川村五子
 冬桜一票一揆起こさうよ
 栗原利代子
 風花やみんな追はれてゐるやうな
 太田継子
 震度六のつぺの鍋を突き上ぐる
 渡辺真帆
 三ヶ日貫く棒の余りけり
 岩上諒磨
 湯気の中均す麴や初仕事
 田中とし子
 子等の靴大きくなりて年新た
 小林祐子
 日向ぼこ眠ればこの身真ん中に
 小松市子
 寒月の港を原子力空母
 田中優子
 雪ばんば柩のごとき能舞台
 広枝千鶴子
 はらわたに慟哭詰めて鳥雲に
 増田義幸
 ゆく年や驚きやすき小鳥たち
 柴野公子
 どこまでも難民の列クリスマス
 浜智子

*

綿虫の仕事納めて消えてゆく
 池田康樹
 柀の香やわが夢に我が今際
 上村敦子
 淑気満つ金刀点の反り加減
 玉木愛子
 元旦や海の中より日は生まれ
 我妻民雄
 影もたぬ硝子の街や鳥渡る
 木村安以
 水喧嘩ありし田冬の苺挽ぐ
 二階堂なつみ
 豚饅蒸す年の湊の中華街
 樋上照男
 星冴ゆる夜やはるかなる白瀬しろせ嬴あや
 高橋龍治
 鳳仙花ぼんとはじけてケンケンパー
 関園子
 サークスのテント畳まれ大枯野
 草野薫子
 鱈酒の鱈しづみゐる地獄かな
 廣瀬西山
 独楽回る地下に蠢うごめく活断層
 荒木仁
 雲は雪にむかし傘連判状
 古田了
 歳晩の書庫にゐる吾は深海魚
 松本京子
 年の瀬やしがらみ抱へテント泊
 福田紫枝子

巻頭寸言 俳句鑑賞学を提唱したい。俳句を鑑賞することはいわゆる評論を書くこととは違う。この区別がわからない人が多い。評論は論理が明快で、一貫していることが要件である。原因―結果を重視する。そのための補強として資料も整える。的確な知識も必要だ。予め、論者の側に思想的な見方があった方が分りやすい場合が多い。しかし、俳句鑑賞にはなによりも、俳句が読めない鑑賞ができない。読めるとはどういうことか。虚心坦懐に、先入観を持たないで俳句に向かうこと。自分をまっさらに、意味以上にイメージを豊かに浮かべる心を開くことができるかどうかである。狭い体験に固執し、予め用意した基準で俳句を裁断しないこと。どんな句でも俳句との対話の中からその都度評価基準を新しく決めていく。これが一番大事であり、難しい。

能登大地震詠をどう受け止めるか

遊びゐる冬日を能登へ送りたし 国見 敏子

能登大地震に関する俳句が多い。通り一遍の作ではなく、気持が入っているか。「遊びゐる冬日」に俳句的な工夫があ

旧暦十一月甲子(きのえね)の日は大黒様の祭日。神話では火攻めの大黒を鼠が洞窟へ避難させ救ったという。「子祭」が冬の季語。酒、米、黒豆、二股大根などを供え、祀る。山人が関わる祭か。「耳あけ」は十二月九日、山形県飯豊山麓の行事。大黒に来年の福を齎してもらおうという。その関わりも興味がある。

冬桜一票一揆起こさうよ 栗原利代子

かつて一九八九年の参議院議員選挙で、土井たか子が率いて世直し運動を展開したことを記憶している。「一票一揆」と称した。政治も腐敗、世の中の所得格差も増大。世界が揺れている。災害地へのボランティアは集まっても、明日も未来も見えない。生きる歓びが分散してしまい、ばらばら。作

今月の秀句

風花やみんな追はれてゐるやうな 太田 継子

能登大地震がある。ウクライナやイスラエル・ガザの戦争の終結の目途が立たない。世の中、落ち着かないのである。「追はれてゐる」気ぜわしい圧迫感がある。雪片が舞い、気持ちが沈む。どこか明日が見える穴が空かないか。卒寿を過ぎた年配者にして、このところなかなか身につまされる俳句が生れ、感心している。ご本人は命がけという。

る。手前は勿体ないほど恵まれた晴天。これを能登へ。なにかしてあげたい気持があるが見つからない。気持ばかりであるがという平凡な思いへの着眼にセンスがある。

震度六のつべの鍋を突きあぐる 渡辺 真帆

長岡在住の作者。先般の地震で新潟県の同地区が強震であった。その体験詠か。「のつべ」汁を支度中とは臨場感がある。いつ襲うかわからない。俳句をまとめることは張り詰めた気持とすれすれのところを掬う。作句工房がよくわかる。一句一句がその積み重ねとはなかなか苦勞なことだ。小刻みなのちががかかっている。

組始珠洲の浜塩ひとつまみ 久保美智子

能登大地震により珠洲産の塩を意識したことかもしれない。それが友情である。私も能登真浦の塩田の塩作りがどうなっているのか、気になっている。輪島塗もどう立ち直るか、気が遠くなる負債を国単位で救済できないか。政治家の英断が待たれる。これは今後大きな課題になろう。

子祭や道深々と山へ入る 川村 五子

者の気持が判る気がする。冬桜は純真だ。

三ヶ日貫く棒の余りけり 岩上 諒磨

虚子の「去年今年貫く棒の如きもの」の句が下敷きにある。三ヶ日過ぎて、変化がない。世の中が活発に動かない。ダルな世を若者が虚子を超えた詠み方をして淡々と詠ったもの。あるいは棒が長すぎたと剽軽に言ったものか。

湯気の中均す麴や初仕事 田中とし子

寒造りの杜氏仕事をきちんと捉えている。手堅い。職人はどんなに世が変わっても技の世界。疎かにしないのが快い。

子等の靴大きくなりて年新た 小林 祐子

嬉しい母親の気持を素直に表現した。新年なので、平凡な靴への気づきが初々しい。

日向ほこ睨ればこの身真ん中に 小松 市子

齢とった実感である。目を睨ると、自分が中心。よく生きた感慨である。日向ほこをしながら自分は自分という気持になつていく。俳句でないと端的に詠えない。巧い句である。

寒月の港を原力空母 田中 優子

横須賀あたりか。静かに再軍備が準備されていく怖ろしさ。寒中の真夜中とは。

雪ばんば板のごとき能舞台 広枝千鶴子

綿虫が舞う。静謐そのものの能舞台。比喩が鋭い。

はらわたに慟哭詰めて鳥雲に 増田 義幸

わが静生句を踏まえたものか。「慟哭」をどう受けとるか。

ゆく年や驚きやすき小鳥たち 柴野 公子

野外の鳥か、屋内の鳥か。大晦日なので不思議さがある。

どこまでも難民の列クリスマス 浜 智子

ヨーロッパ大陸か。「どこまでも」が哀しい。誰が救済するのか。生きるとはもう考えられない悲惨さである。

柵の香やわが夢に我が今際 上村 敦子

静かに横たわる。手を尽くしましたがこれで、とか何とか。

今月の秀句

綿虫の仕事納めて消えてゆく 池田 康樹

原句は「綿虫も仕事納めと視界去り」であるが硬い。言葉をやや柔軟に。それには恰好を付けないこと。ことばの概念砕きを。柔軟なやさしい用い方をするように。長い長い期待から、ようやく詩心に巡りあった気がする。綿虫の気持になれたのがうれしいことである。

的なイメージ。あるいは、春節前の光景か。横浜か神戸など。

星冴ゆる夜やはるかなる白瀬轟 高橋 龍治

南極探検家「白瀬中尉」。秋田県金浦生れの軍人である。私も、先年、秋田で白瀬の活躍を知り、以来、世間が拡がった。秋田県人には大いなる誇り。逝去されたのが一九四六年、戦後と伺い身近に感じたものである。豪胆な人物か。

鳳仙花ぼんとはじけてケンケンパー 関 園子

調子がいい。ケンケンパーは子どもたちの遊び。童心に返ったようだ。鳳仙花の実の弾ける軽さが生き生きと。

サーカスのテント畳まれ大枯野 草野 薫子

晩秋のサーカス設営が終わり、暖国へ移動する。いまもむかしもサーカス暮らしには哀愁がある。先年「サーカスの子」という実話のような小説を読み、感動した。大枯野のスケールの大きさを捉えたのがいい。ちまちましていない。

鱧酒の鱧しづみある地獄かな 廣瀬 西山

下五音「地獄」に、はっとした。この鱧のためにいくらでも飲まされていいのか。かなり酔いがまわり、呂律もおかしい。鱧に八つ当たりしているものか。

独楽回る地下に蠢く活断層 荒木 仁

構図がいい。独楽と活断層との対比による不安の醸し方に

植木等の「ハイそれまでヨ」ではないが、今際の際を夢にみることもある。柵の香が慎ましい。全体にバランスがとれた佳句。

淑氣満つ金刀点の反り加減 玉木 愛子

「金刀点」とは書道で「大」の字を書く時に、最後に右下に引く字の撥ね具合をいう。息を呑むような静かな呼吸。こんなことも俳句になるとは感激だ。

元旦や海の中より日は生まれ 我妻 民雄

類想があるが、これ以上の大景はない。単純にして明快。見事に詩情がある。詩はまさに虚構そのものでありながら、実景として仰いでいる。

影もたぬ硝子の街や鳥渡る 木村 安以

人工の町の上空を鳥が渡る。映画のスナップのようだ。感情は殺してクールに描く。心は拘らない、感覚だけの世界。

水喧嘩ありし田冬の苺挽ぐ 二階堂なつみ

田が舞台の夏と冬のドラマ。もう米を作らない。効率よくハウス栽培の苺作り。冬に出荷。俳句よりも小説の世界であるが、散文の素材を俳句に纏めた手腕はなかなか。

豚饅蒸す年の湊の中華街 樋上 照男

中華街の新年、春節まで間は間があるう。「年の湊」は日本

注目した。わが住まいの地下がまさにこれ。ああ怖い。

雲は雪にむかし傘連判状 古田 了

郡上一揆は首謀者を特定できない「傘連判状」で名高い。知恵がある。連句に堪能な作者だけに物語風な楽しい句ではないか。雪に変わる。山峡の町も冷えてくる。郡上の作者。

歳晩の書庫にゐる吾は深海魚 松本 京子

明快な作。歳晩でもここは書庫の地下。深海魚気分。こんな風に今年も暮れて。本との務めとは、もの思いも沢山。

年の瀬やしがらみ抱へテント泊 福田紫枝子

冬山へ。山中のテントで思いは複雑。しかしこれが生きることかと。好きでやっている山行だけに、がんじがらめ。

他に推薦候補作をあげる。

徐にちからをぬきて裸木に 奥山 源丘

冬至湯やミクロネシアのシャボンなど 齊藤すみれ

ふくろふよ父の柩を追ひし日よ 司 雪絵

人類の夜明けの遠し初日の出 鈴木 臣和

煤逃やミニシアターに好きな席 松井 弓

薄紙のごとき日常寒昂 鍋木ひろこ

去年今年一句一句を吾が史とす 櫻井 喬二

ひととせの短くなりぬ晦日蕎麦 藍葉 町子